



貝沢昌幸さん(49)＝調理師

—ご出身はどちらですか。
今住んでいる所と同じ、
日高管内平取町二風谷です。
—調理師をなさっている
のですね。

ええ、国立日高青少年自然の家という施設で、料理長をしています。もう19年ほどになりますね。

—調理の世界に入ったきっかけは何ですか。

身近な人のしょうかいですよ。中学を卒業して洞爺湖のホテルで働き始め、それから何力所かで修業して独立しました。

—アイヌ協会でも活動されていましたね。

ええ、平取アイヌ協会の青年部というところで、青年部長をしていました。今でも会員です。青年部長をしていたころは、道東の阿寒や胆振管内白老町の若い世代と交流することに力を入れていました。準備は大変ですが、楽しいことだから頑張れます。

—貝沢さんにとってアイヌ

文化はどのようなものでしたか。

両親がもともと木彫りやアットゥシ織(樹皮のせんいを糸にして織った布)をしていましたから、いつも身の回りにあって特別なものではありませんでした。自分の兄弟も工芸の仕事をしたりアイヌ語教室に関わってきましたから、うちの子供も自然な形でそういうところに関わっていますね。アイヌ語ラジオ講座でアシスタントをしたりとか。

—お子さんにも、自然な形でアイヌ文化にふれてほしいということですね。

そう。若い人たちが堂々と生活できるようになってくるから、このままみんな頑張ってくれたらいいと思う。他の地域との交流も続けて仲良く楽しくやってほしいね。

—読者に伝えたいことは。

やりたいと思ったことはなんでも実行してみることです。そうしないと人生を損するからね。

タンベエエラムヤン?

「きみ、これ知ってる。」の意味

■干し魚

明治時代よりも昔の暮らしではイトウやマス、サケをよく利用しました。夏に川を上ってくるマスをサキベ(夏の食べ物やヘモイ)といいます。樺太では秋になると上るサケをチュフチエ(秋の魚)、北海道ではチュクチエフといいます。魚は干して保存しておくほか、周りの民族との交易で商品にもしました。マスが上る季節はまだ暑く

と呼びました。て、干しただけではくさつてしまいます。そこでイマ(さつと焼いて水気を飛ばす)してから干します。この時期は川のそばに小屋を造ってねとまりし、イマの仕事をしました。こうした場所をイマチセ(焼き干し小屋、イマコタン(焼き干し村)と呼びました。樺太では、魚の身を皮に付いた部分と身だけそいだ部分に分け、皮つきのものをサハベ、身だけをマハクルと呼びました。

魚をとって干し魚を作っていると、カラスがみな持って行ってしまう



カラスの恩返し

からふとにしかいがん うしろむら はなし
＝樺太西海岸鵜城村の話

(「和田文治郎樺太アイヌ説話集」より)

ある村に1人の若者が暮らしていました。毎日魚をとっては、干し魚を作りました。ところが、エトウフカ(カラス)たちが飛んできて、干した魚をみなぬすんでいつてしまいます。また魚をとってきても干しておくと、また全部ぬすんでしまうので、若者はすっかり困ってしまいました。こうなつてはエトウフカを退治するしかないと考え、ある日、魔物をたおす棒を作り、それを持って出かけました。

山に向かって歩き、手前に見える山と、おくにかくれて見えない山の間を登っていくと、大きな家がたっていました。若者が戸を開けて入ると、中にムシロをつり下げた戸があり、それをめくると、またムシロがあります。それをくぐるとまたムシロがあります。それもくぐつて中に入ると、いろいろのそばに大きなしらがのおばあさんがいました。おばあさんは、まつげが、ろのふちにつきまゝなほどつづつして、いねむりしています。足でこつてやると、ちよつと目を覚ましたのかモソモソ動きました。そうして何度か足でこついても、やっぱり起きません。エトウフカたちの姿が見えないので、若者は部屋すみにかくれることにしました。

おばあさんの仲間(カラス)の化け物に追いかけられる。そこへ助けたカラスが



帰りの山道で、犬を連れたオヤシ(人食い化け物)に出会いました。オヤシが「おまえはどこから来た?」と言うので、若者は訳を話しました。オヤシは耳が遠く、何度も「ホ?ヘマタ?」(あ?なんだ?)と言うので、「エトウフカの村をやつた!」と大きな声で言う、と「なんだ!」とおこりだしました。若者はにげだして川原に生えていた木に登りました。下ではオヤシがおの木を切り始め、犬は大口を開けて若者が落ちてくるのを待っています。するとそこへ2羽のエトウフカが飛んできて、犬の口に何かを落とすと、犬は死んでしまいました。次に1びきのキツネが現れて、オヤシに

「手伝うからおのを貸せ」と言いました。オヤシがおのを貸すと、キツネは木を切るふりをし、川へおのを捨ててにげました。オヤシはおのを拾いに行き、また切ろうとすると、今度はウサギが来て手伝うと言います。オヤシがおのをわたすと、切るふりをして川へ投げこみました。オヤシはおこりながら拾いに行き、川の深い所で足をすべらせてしまいました。そのまま流されるうちに、木の枝に腹が引っかかつてやぶけてしまい、カエルだのへびだのおわんだのおぜんだのいろいろな物をまきちらして死んでしまいました。それを見て、若者は安心して帰りました。

いたずらしても憎めない

このお話のように、カラスがいたずらしたり、失敗したりする話は、あちこちに残されています。そのため、カラスにはいたずらものの困ったやつ、というイメージがあります。その反対に、太陽が魔物に飲みこまれそうになったとき、カラスが助けたという話があり、だから「カラスの悪さは大目に見よう」とも言われています。

今回はカラスのいたずらから話が始まりますが、いちばん悪いのはカラスに食べ物を集めさせていたおばあさんかもしれません。その後に出てきた耳の遠いオヤシ(化け物)は、おばあさんの仲間だったもので、若者を追いかけ始めました。若者はピンチになりましたが、助けてやった2羽のカラスによって今度は助けられました。最後はキツネとウサギの協力で、助かりました。この2ひきも、カラスたちが呼んだのかも知れません。



夜になつて1羽のエトウフカが帰ってきました。エトウフカは、口にマハクル(魚の身だけを干したものを)をくわえていました。それをおばあさんにわたすと、おばあさんは部屋のおくにしまいました。次に魚の頭をくわえたエトウフカが入ってきて、おばあさんにわたし、おばあさんはしまいました。また1羽が入ってきて、ブイ(エソノリユウキンカ)という草をわたしました。また1羽が入ってきてトドの肉をわたしました。また1羽が入ってきて魚のしっぽをわたしました。そして、家の中はエトウフカでいっぱいになりました。みんなで食事を始めたころで、おばあさんがこう言いました。「今朝、カムイだかアイヌだかわからないが、入ってきて私をけとばした者がいる。今日は何かあるかもしれないから、みんな気をつけてねなさい」。やがて、いろいろの火も消えて暗くなったところで、若者は物かげから飛びだしてエトウフカたちをみんな退治しました。すると、最後に残つた2羽が「助けてくれたらきつとお礼をします。助けてください」と言うので、若者はこの2羽を許して帰ることにしました。

カラス退治に山に行くと、カラスに食べ物を集めさせるおばあさんがいた

